

天地

ネットワーク テーブル 417号

発行：天地シニアネットワーク／2016・1・15

「目 次」

T E N T I ・ T O D A Y			2
会員の広場<年末、年始のメール、年賀状から>			3
連載作品			3
旅 行 記	紺碧の空の下に<オーストリア・クロアチア・スイス・スペイン> <クロアチア> (2) 「クロアチアの首都ザグレブは、オーストリア、ハンガリーの支配下に造られた街です」	大竹 漢洲	7
天地 アーカイ ブス	江戸川柳で読む日本裏外史 (2) 6回<元弘の乱と楠木正成一不可能を可能にした智謀と奇計>	高野 冬彦	10
	ティートン・バレー釣り紀行 (米国アイダホ州点描) (II)	魚山 釣太	14
講演会他	「奈良興福寺文化講座」「新三木会」		17
商品情報			18
事務局			19

美容と健康維持に「アルガンオイル」

モロッコ女性の自立とサハラ砂漠の緑化を支援します

アルガンオイルは「健康と美容に良い」ということで注目されています。

92ml @1500円

会員特別価格です。商品は、ノンロースト・ローストの2タイプあります。ノンローストは、食用、化粧の両用、ローストは食用専用です。化粧用としては保湿効果が抜群で老化防止、肌荒れ防止に効果があり、単体で使えます。男性の方で使用する方も大勢います。

プロポリス(ブラジル産・ユーカリ種)

1本 @2500円 (12パーセント・30ml)

本品は、ブラジル政府・承認マークのある正規の商品です。メーカーはブラジルのイタリア系の会社です。化粧箱入り・約1ヶ月の使用量

TENTI TODAY

謹んで新年のご挨拶をもうしあげます。昨年同様に本年もよろしくお願ひ申し上げます。

暖かで穏やかなお正月でしたが、良すぎて気味悪さも感じました。箱根駿伝、気温が高まると思いがけないブレーキが起きます。今年は何事もありませんでしたが、上位チームはおそらく日ごろからあらゆる状態を予想して練習していたのでしょう。選手の質もありますが監督、コーチなどの手腕が大きくクローズアップされた大会でした。

天候には恵まれましたが、世の中一般のムードは、重いお正月でした。日経新聞の1月1日の社説に「2016年、日本経済は景気回復基調にあるものの力強さに欠け、企業マインドも消費者心理もすっきりしない。将来に対する不安をぬぐいきれないためだ。世界的な競争に打ち勝ち、生き残っていくためにはどうしたらいいのか。」そのために「一歩前に踏み出す道を考えたい。まず大事なのは、おのれの姿を正確に知ることだ。というのは、思い描いている日本の自画像がズレているのではないかと考えられる。こびりついている世界第2の経済大国の修正から始める必要がある」とありました。

国会論戦では、政府は世界2位に甘んじるとは言えずに、前政権時代との比較をもっぱら言い訳にしていますが、現在においては経済大国から滑り落ちている現実をオールジャパンで認識することが大事です。再度の挑戦にはコストがかかりますから、国民の絶大な協力が必要です。

折しも原油価格の下げ、中国経済の低迷などから株式市場が暴落を続けています。国民の不思議が強まり、政権不信につながる懸念が出てきました。

企業戦士として活躍され、長いお付き合いをしてきた諸先輩、奥様方が苦境にあるのを聞き、心配しています。元大手鉄鋼メーカーの部長だったAさんの奥様からの電話、「デイサービスでは大変なので介護つき老人ホームに入れた所、入浴が嫌いで、週二回の入浴時には罵詈雑言、暴れまわる。そのうえ体が大きいので介護士も大変、いつ退去を言われるかと心配で鬱病になりました」。同じく大手石油化学の役員だったBさんの奥様のお話、「脳梗塞を発症、高尾に近い病院でリハビリ入院中だが、自分が腰が悪く、ほぼ寝たきり状態なので、新宿から見舞いなどいけない。介護1の認定なので自分の生活をするのが大変」。お二方ともお子様たちは離れていて夫婦二人で生活しています。マクロとミクロの乖離が大きくなっています。

人口減少が、諸悪の根源と考えます。30年も前から言われてきましたがほとんど有効な手が打たれていません。20年後に8500万にまで減ると他人事のようにいう時代は過ぎました。国際社会での大国化を目指す日本であればいずれ日本も難民を受けざるをえないと予想されます。外国人の移住について早めに国民的な合意を取り付け、引き受ける方策、対策など具体化する必要があると考えます。

会員の広場

昨年の暮れと新年に天地シニアにいただいたメールと、個人的に年賀状としていただいた中で、気になる文章をピックアップして掲載させていただきます。敬称略としていますのでご容赦ください。

昨年暮れにいただいたメールから

「強力なリーダーシップ・・・、だが路線が違うと思う人・・・」私も「違う」と思っている一人です。喧嘩腰なパフォーマンスと甘ったるい言葉遊びだけのようで・・・。

いくら諸費電力が少ないLEDとはいえ、日本中イルミネーションだらけ。宇宙船から見る夜の日本は、狭い国中ギラギラと眩しいくらいに輝いています。これが豊かさなんだと言わんばかりに・・・。真っ暗な夜も大事なんですね。

何十頭かの被曝した牛を、汚染された稻わらを食べさせて飼いつづけている人の

「私は牛飼いだから、彼らを見殺しにはできない。

最後まで彼らに付き合いますよ」

という言葉が報じられていましたが、『福島原発問題は「アンダーコントロール」だ』と言い切った人も、このこと当然承知の上なんでしょうね。

まあ、こんな話の前に、まずは自分の健康管理。風邪など召さぬように、新年をお迎えください。(有田)

一年間お一人でネットワークテーブルを発送していただきありがとうございました。来年もよろしくお願ひいたします。長くしていかれるこそ長生きの秘訣だと思いますので頑張ってくださいね。

私は長年親兄弟が認知症の“け”があり、心配で病院で診てもらったりしておりそのけはないとの診断でしたがこのたび、やっとというか血圧の変動から（上が280、下が65と同時に出了）いろいろ検査し、レバーー小体型認知症との診断が出ました。いろいろ合致する症状があったのでやっと病気にたどり着いた安堵感もありました。

来年1月5日から13日まで関東中央病院（学校の先生のための公立病院）検査入院することになります。これからどのような生活をしたらよいかが少しでもわかればと思っていますがまだこの病気は研究的な範囲でどのような生活をしていけばよいかを示してくれるかは未知数かもしれません。幸いなことにその分野の日本や、国際的にも第一人者の先生がおられるので実験データーかもしませんが役に立ち、少しは私に還元されたらと希望しております。

私が最初に変と感じたのは、小俣さんと出会った、オセロゲームでした。40年以上していたゲームが2年前くらいから急激にレートが下りてきたのです。それは一手の読みをしていて、いくつかの読みの中で排除した悪手を忘れて打ってしまうことが原因でした。それからいろいろのことを書き留めておりましたがそれがすべてこの病気によるもののようにですがなかなか同じとは思っていなくわかりませんでした。たとえば、便秘症、夜変な夢を見る、汗が頭にかく、寝てから手がしびれて起きてしまう、指先に血液がいかないなどいろいろです。パーキンソン病と近い病気です。

これからが問題ですので高齢者になっても好きなことや建築の仕事は続けていくつもりです。幸いにも今年には二世帯住宅の設計依頼が入っておりますので設計はこれでおしまいかもしませんが建築相談はこれからも積極的にしていくつもりです。勿論長年してきた世田谷区のマンション相談の仕事も続けるつもりですが。(竹田)

416号を有難うございます。津田さんがコツコツと通信を作り送信して下さる事は私にとり大きな励みです。天地ネットの中身はとても前向きで素晴らしいです。

お体に気をつけて永く通信を発行して下さい。良いお年をお迎え下さい。

(近藤)

この一年振り返ってみて、改めて体力の衰えを感じました。特に下半身はガタガタですが、幸い上半身はまだ達者なので、極力外出に努め自治会シニアクラブのお手伝いも続けています。3月にはJALスカイミュージアムとヤマト運輸クロノゲートへバスでお連れします。

百点満点の政権はあり得ないと思いますが、安倍政権はぎりぎり合格点は差し上げられるかなと思っています。IS問題が一番の気がかりですが、来年も良い年になることを祈るのみです。それではよいお年をお迎えください。

(塚口)

早速ネットワークテーブルに案内<416号・ホームパーティーの件：事務局>を掲載して頂き有難うございます。

参加者が出ることを期待しています、問題は会費を無料にしたことで参加すると何かあるのではと疑いの目で見られるようです、初めて参加した人も信頼できる友人からの紹介だから参加したと言っていました。

少しずつ賛同者が増えることを願っています。今年はお世話になりました、来年も宜しくお願ひします。(久崎)

新年のメッセージ

新年おめでとうございます。皆様元気に楽しい年をお迎えした事と思います。当方も昨年12月中旬に東京より帰り、こちらの生活リズムに戻りました。毎日の早歩き一時間、週3回のゴルフ、日本のテレビ鑑賞、友人との会食(夫婦単位)、日本の友人とのメール交換等々、知的な事は一切やっていませんが、かかる健康的な生活と節食のお陰で血糖値は毎日ほぼ正常です

(インシュリンは欠かせませんが)。今のところこちらの生活は問題なく、楽しくやっています。小生もそろそろ80歳近く、当国滞在も30年になるので最近は下記2点を考えています。

第1点は体の動けるうちにできるだけの事をしておくこと(主に旅行)。今月ブラッセルに一週間(日本、ベルギー外交関係樹立150周年記念行事参加と雅楽演奏会見学)、3~5月の東京、6月のイタリー食べ歩き旅行をすでに計画しています。

第2点は引き揚げ準備で、具体的には家の売却です。売却といつても当地をすぐ引き揚げるのではなく売却相手に家賃を払って借家人として住み続けるアイディアで、身軽になったうえで少なくとも数年住み続ける考えです。25年以上我々の為に尽くしてくれた使用人家族にはそれなりの事をして離れる心算です。

近況として、仲良くしているモロッコ人、ギリシャ人カップルの家にクリスマス前に招待された時の写真送ります。同席しているのは仲良しの元当国経団連会長夫妻、元駐モロッコギリシャ大使夫妻ですが、最近は皆さん元、元ばかりの付き合いです。

大晦日には15歳から90歳までの友人30人程をわが家に招き、山海の珍味を出した上で夜明けまで踊りまくり、大いに喜ばれました。皆さん大変元気で90歳のフランス人未亡人は結構アルコールが入っていたにも拘らず自分で運転して深夜、家まで帰りました(翌日無事着確認)。男寡、未亡人等普段は寂しくしている人たちが楽しそうに踊っている姿に小生も嬉しくなった次第。日本では考えられない事でしょう。

処で、ちょっと古い話になりますが明けて一昨年当国国立劇場と我が家で「北野台雅楽アンサンブル」に公演して戴いた時の状況がインターネットに詳しく出ている事を最近知りました。このアンサンブルの海外公演の項是非開いてみてください。我々の姿も出ています。本年も皆様に良いお年となります事を祈念します。(在モロッコ・カサブランカ・岸)

私は、相変わらず木工と植木屋を楽しんでいます。3年前にスタートした坂東三十三ヵ所札所巡りも、昨年12月に三十三番ヵ所である千葉県館山の那古寺に着き、無事結願を果たすことができました。全行程を歩いて昨年結願を果たした人は私で5人目とのことでした。延べ57日かけて1200キロ近く歩いたことになります。年ごとに1日当たりの歩行距離が短くなり歳を実感する旅でした。(小尾)

ネパール・カトマンズの人々は、信仰深く貧しくても平和な暮らしをしていました。突然の大地震で、人々の生活は一瞬のうちに破壊され半死半生の環境に放り出されました。まだ復興は半ばです。

災いも病も同じです。旅人も再々発したがんと闘いながら新しい年が迎えられました。命があれば、必ず明日が来ます。人間は強いものです。

吾が道は、一以て之を貫く『論語』
(大竹)

昨年は前大戦の終結から満70年を経て、あらためてあの戦いの意義を考えられました。この歳の天皇、皇后の両陛下の旧戦地ご慰霊の旅とお言葉は、まさに不本意に果てた将兵への鎮魂の祈りでもありました。「平和であつたならば、社会の様々な分野で有意義な人生を送つたであろう人々が命を失つたたわけで、このことを考えると非常に心が痛みます。」とのご発言は、今生きる私たちに大いなる自戒と励ましを与えたのではないかと思いました。

ある老人がせっせとリンゴの木を植えているのを見て人は言った。「その年でいまさら植えても収穫できないでしょう」「何を言われますかあなたも私も子供のころから美味しいリンゴを食べてきましたでしょう。その木を植えているのです。」と老人は手を休めずに答えたという。私どもも少しだけリンゴを植えるお手伝いしているつもりです。(梶原)

昨年もお茶のセミナーやイベントやお茶旅を楽しく続けることができました。長年ぜひ訪れたいと願っていたジョージア(グルジア)へ行けたこと、台湾での天空茶会、四万十川流域の茶旅で素敵な方々と交流できたことなど、貴重な体験ができたとつくづく感じています。嫁の任地のフィリピンへ、夫婦で旅行できたことも良い思い出となりました。

今年はイギリスに茶文化をもたらしたキャサリン妃の足跡をたどり、ヨーロッパ最古のサンミゲル島の茶園を訊ねる旅を今からワクワクしながら待ちわびています。

もう少しゆったりのんびり過ごしたら・・・と心の片隅で感じつつも、少しでも役に立てるうちは、元気にお茶街道を走っていきたいと思っています。
(川谷)

中東発のテロ、難民、中国発景気の鈍化、環境汚染、領土問題、国内での原発、沖縄、赤字国債、安保、拉致、慰安婦と内外での未解決先送り問題が山積になっており、日本丸の舵をどうとっていくのか、安倍船長にどこまで任せること不安なことばかりです。

そんな環境ですが、私的には70歳を前に大きなイベント、高校の同級生で結成している親父ジャズバンドの初ライブを昨年末に神田のミニホールで行いました。満席で演奏に対し好評価だったこと、そして何よりも70歳の親父たちがワクワク・ドキドキしてやり遂げた満足感、最高の気分で2015年を締めくくることが出来ました。技術的にはまだまだ未熟で課題が山積していますが、これは努力で解決できます。この歳になってまた新しい目標ができました。

(中山)

戦後70年、曲がりなりにも平和でした。祖父母や両親ほどの苦労はしませんが、戦後の混乱を記憶している最後の年代になりつつあります。フクシマはじめ三陸の苦しみを忘れたり風化させてはなりません。これらのこと次世代にどう伝えるか、微力ですが試みを重ねます。

(林)

花が好き 本が好き
人が好き おしゃべりが好き
足腰を鍛えて 脳のトレーニングをして
楽しかったといえる人生を送りたい

そして
まもらなければならぬと思う
自然の豊かさを
平和のありがたさを

願わくば
次の世代の 役にたちたい
73歳の今 私に何ができるでしょう
(増野)

連載作品

紺碧の空の下に・・<オーストリア><クロアチア><スイス><スペイン>

<クロアチア> (2)

大竹 漠州

クロアチアの首都ザグレブは、オーストリア、ハンガリーの支配下に造られた街です。

首都ザグレブで、クロアチア初めての朝を迎えました。旅に出ると時差の関係で必ず目覚めが早くなります。朝食前にホテル周辺を悦子と散歩しました。緑濃い街並みには、美しい朝陽が紺碧の空に輝いています。今日は休日で人と車の姿はありません。ホテルは新市街地にあります。恰も公園都市です。終えるような暑さを日本で経験した旅人たちには、寒いくらいな気温です。15℃しかありません。朝気温が低く昼には高温になるのがこの地方の特徴です。いわゆる地中海気候です。

ザグレブは、日本語で“熊山”を意味するメドヴェドニツア山のなだらかな裾野からサヴァ川にかけて、広がっている街です。ホテルから公園の中を散策するような気分で、ザグレブ中央駅まで歩きました。市街図では遠く感じましたが、僅かな時間で駅に到着しました。中央駅の地下通路を潜ると反対側が旧市街地に一変しました。ヨーロッパの旧都市がそうであるように、ザグレブも北の旧市街地と南の新市街地は、イリツア通を境にして画然として分かれています。新市街地と言っても 19世紀から世紀末まで、オーストリア時代に建てられた古い建物が並びます。懐かしさに惹かれて旧市街地に入りました。緑の茂る傾斜した道路を上がっていくと、旧市街地の中央に位置する所に大きな広場がありました。イエラチッチ広場と呼ばれています。19世紀にクロアチアで活躍した失意の将軍名のイエラチッチに由来しています。

19世紀のクロアチアの国は、オーストリア・ハプスブルグ家に支配されました。やがて政策でハンガリーにも組み込まれ、クロアチア国民の意志は無視され間接に統治されることになります。簡単に言えば二重の支配下に置かれていた国でした。しかし属国といつても自治権を得ていたので、ハンガリー議会にはクロアチア代表部を送り込むことはできました。しかしハンガリー議会でクロアチアの行政制度をオーストリア帝国から分離して、ハンガリーに組み込む提議が出されました。しかもクロアチアの母語をハンガリー語に国民の反発と怒りはハンガリーに向けられました。同じ頃(1848年)、オーストリア帝国の主要都市ウィーンからブダペストへ広がった革命が、ハンガリー全土にも飛び火して、やがてはハンガリー独立運動として内乱まで発展することになります。

当時クロアチアにあって、皇帝派であった主人公イエラチッチは、オーストリア皇帝に忠誠を尽くして、ハンガリーの独立運動に対決することになります。しかしロシア帝国が調停に入り援軍が派遣され、ハンガリー内乱は鎮圧されます。この結果クロアチアとスロヴェニアの両国は、ハンガリーから独立してオーストリアの一州として帰属させられます。しかし状況は以前と全く変わりません。クロアチアもスロヴェニア人もハンガリー内乱に乗じて自治権を獲得して、あわよくば南スラヴ人を統合した民族国家を期待していましたが、実現を見る事はありませんでした。失意の内にイエラチッチ将軍は亡くなりました。第二次大戦後オーストリア帝国が滅亡して、ドイツ・オーストリア・ハンガリー各国とユーゴスラビア共和国が成立することになりますが、共和国広場に立つ将軍イエラチッチ銅像は、ユーゴスラビアへ共和国瓦解からクロアチア独立までの長い歴史を見てきました。

旧市街地は、カプトルとグラデツという異なった二つの丘陵の街から成り立っています。丘陵の一つ成す街・カプトルは、クロアチアに於ける宗教の中心地でもあります。広場から階段を上って青果市場のある地域に入ると、目の前に 100m を越えた二つの尖塔のある大聖堂が現れました。カプトルのシンボルの教会です。カプトルは丘陵の街で、何処へ行ってもなだらかな坂道が続き、簡単に歩いて巡ることができます。しかも、街の路地から常に二つの尖塔が望まれるのが特徴です。この大聖堂に守られて、人々は過去から日々の生活を送っていました。しかしこの街・カプトルの歴史は、決して平穏な道程ではありませんでした。

大聖堂は、以前在った教会が立て直されて、11世紀の終わりにロマネスク様式として生まれ変わりました。しかしヨーロッパ中を震撼させた大事件が1242年に起こります。遠い東方からモンゴル軍の侵攻でした。クロアチアも大きな被害を受けました。大聖堂も破壊されてしまいます。その後にゴシック様式で再建しなおされた大聖堂が今日の姿です。正式には聖母マリア被昇天大聖堂と言います。カプトルの旧街が宗教の中心になったのは、この地に司祭座がおかれた事によります。数多くの司祭や宗教関係者が住む街に発展していきました。

15世紀を迎えると隣国のセルビア、ボスニアとともに、今度はオスマン帝国軍の侵攻で悩まされます。隣国が次々と占領されて、オスマン帝国軍はサヴァ川まで迫ってきました。クロアチアも危機に晒されますが、豪雨が降り

続きサヴァ川が氾濫して、地盤の低い対岸を大洪水が襲ってオスマン帝国は一蹴りされてしまいました。クロアチアという国は、数多くの災難・災害を潜りぬけて今日にいたっている奇跡の国です。

もう一方の丘陵に成す街は、グラデツツと呼ばれ商工業を営む人々が、古くから住んでいました。この町の人々が愛しているケーブルカーがあります。決して規模の大きなものではなく、曲がりくねった道路に沿って敷かれたケーブルカーです。街に住む人々は愛を込めて「年を取った貴婦人」と呼んでいます。年齢は120歳と聞きました。残念ながら時間的に乗る余裕はありませんでした。又、二つの旧市街地の中心に「石の門」があります。かつてグラデツツの東門にあたっています。当時は木造の門でした。しかし雷が落ちて消失してしまったため、石の門に造り替えられました。「石の門」に造られた部屋には、聖母マリア像が安置されていて、信仰深いザグレブっ子が引っ越し無しに訪れて蝋燭を掲げて、室内は明るい光で満ちていました。

「石の門」から西に向かうと、右手にユニークな屋根をした聖マルコ教会が現れています。13世紀に建てられたゴシック様式の教会です。この教会は屋根のデザインが特徴です。赤、白、青色のタイルが用いられて、二つの紋章が描かれています。左の紋章はクロアチア王国、スロヴァニア（現クロアチア東部）・ダルマチアのもので、右はザグレブ市の紋章です。この教会が建てられた当初から、この地域は自由都市で、多くの職人が住み着いた街といわれています。聖マルコ教会は彼らの守り神でもありました。なかには瓦職人も屋根葺き職人もいた筈です。信仰心の深い彼らが、進んで聖マルコ教会の屋根を葺き直し、今日見られるような紋章で飾ったに違いありません。世界に二つと無いユニークな教会です。今日は日曜日です。キリスト教の安息日にあたります。宗教の街カプトル、グラデツツは商店もレストランも閉店で、教会を除いてひっそりとしていました。観光客で賑わっていたのは、ケーブルカーの発着する小さな駅でした。

朝食の時間が迫ってきたのでホテルに戻ることにしました。旧市街地の南に続く新市街地の中心は、ザグレブ中央駅です。更に駅の南一帯は、近代的な建物やマンションが連なっている新街地と呼ばれる地域です。宿泊している Hotel International も公園都市の一角にあります。ホテルの外観は、地中海性気候特有の暑い夏の太陽光線から守るために、黒ガラスで全面が覆われていて、オフィスビルのようなデザインです。客室に設けられた照明器具もシンプルです。テレビもフィリップ製の薄型で、壁に飾られた絵画のセンスが良く、洗面所や浴槽も使いやすく機能的なデザインをしていました。二泊だけのホテルでしたが、居住性には充分満足しました。

ザグレブは観光地ではありません。首都としての政治、経済、学問の中心地です。かつてザグレブは内陸部と地中海沿岸の諸都市を結ぶ交通の要衝でしたが、今日も変わっていません。国内はもとより隣国と高速道路で結ばれて流通業が栄えている都市になっています。又ザグレブは学術都市としての顔を持っていて数多くの博物館、美術館、劇場が、新市街地に集まっています。

再び夕方に悦子と近くの公園まで散歩しました。新市街地は公園の中にある街なので、総てが公園であると言っても過言ではありません。翌朝再びホ

テルから南の方向に散歩に出かけると、ホテルの直ぐ近くに競馬場がありました。競馬場と言っても日本やイギリスのように、数頭の馬に騎手が乗って勝敗を決するものではなく、馬の後に一人乗りのワゴンを引いて走る競馬です。夕方になっても気温が下がらない暑さの中で、練習している騎手がいました。旅人夫婦は、暑さを避けるため木陰に入って暫く眺めていました。ふとマケドニアやギリシャの戦士の姿に重なって見えました。クロアチアのサッカーが強いのは戦闘能力の高い古代ギリシャの血が混じっていると思わざるを得ませんでした。(つづく)

天地・アーカイブス（2編）

（1）

2006年9月に発信した190号から「江戸川柳で読む日本裏外史・6部」が始まっています。その第4回に＜藤原定家と百人一首＞とありましたので、年末を控え取り上げさせてもらいました。なお、次号からその後を順次続けてみます。

高野冬彦さんは、故人となられましたが、都立高校の教諭を経験され、長年にわたってまとめられていた原稿、＜蕪村礼賛＞＜俳句でつづる東京詩情記＞そして＜江戸川柳で読む日本裏外史＞の3編を天地シニアに寄託されましたので、入力しネットワークテーブルに掲載しました。とくに＜蕪村礼賛＞、原題は別でしたが、天地シニアで編集、製本してご希望の方に配布しました（有料＝実費）。以上（事務局）

江戸川柳で読む日本裏外史

高野 冬彦

高野さんは、「鎌倉時代に入ると、歴史資料が急に殖えて、勝手な空想に入る余地が次第に少なくなり、面白みのある川柳も少なくなった感じる」と云われています。こんな書き出しで、第6部が始まります、長いものはありませんが、9回分の用意があります。最後の第7部はあとがきとなっています。

（故小作暁介記）

第6部

第6回 元弘の乱と楠木正成——不可能を可能にした智謀と奇計

樟脳になっても楠は内裏守護

十四世紀に入ると、歴史の潮流は急に激しさを増し始める。1281年の「弘安の役」、所謂「元寇」以後の社会的矛盾の激化は、やがて「元弘の乱」による鎌倉幕府の滅亡から、「建武の中興」を経て「南北朝の対立」へと、歴史は大きな転換点にさしかかるのである。此処では当然章を新たにして書き始めるのが常識だとは思うのだが、川柳の方では、どうもそれが出来難い。作品の質と言い、量と言い、どうもまとまりが悪いのである。

思うにこの時代以後ともなると、史料は沢山あるし、人間関係における利

害は複雑になってくる上に、対立抗争は深刻となるばかり、ウイットやユーモアの介入する余地が次第になくなつて来たのであろう。まして室町以後の戦国時代ともなれば、否応なしの弱肉強食、一瞬の油断も許されない修羅の巷で、泰平の民である江戸っ子から見れば、

「おつかなくって、洒落にもなりやせん」
といつた感じなのかも知れない。ただその中で、この「元弘の乱」などは、作品の数も多く、中々名作も見える方だが、それはひとえに名作「太平記」のおかげだと言つてよい。それによつて、複雑な歴史を理解する視点が与えられ、或る意味では善玉と悪玉の対立といった、江戸っ子好みの明快な舞台が設定されたからでもあろう。

所でこの事件における悪玉と言えば、何といつても鎌倉の執権・北条高時であるが、彼についての悪評としては、代々賢明だった先祖に較べて、生来少々暗愚だったこと、田楽や闘犬を好んで、そのためには千金を借します、時折世間の指弾を受けるような奇行のあったこと位で、若し平穏無事の時代だったら、子供っぽいが愛すべき人柄としてすごされたに違ひないのである。

九代目は田楽好きで味増をつけ
初鰯高時犬にくらわせる
高時の夜回りやたら踏みつける
やすい時儲けて高い時つぶれ

これに対し、反対する善玉の親分と言えば、普通なら後醍醐天皇を挙げたい所だが、この方中々一筋縄では行かない御人柄だし、殊に天皇陛下ともなると、さすがに批判がましいことも言い難く、替わって登場するのが、楠木正成ということになるのである。

楠木正成については、歴史学者の間でさえ、完全には正体のわからない謎の人物とされているらしく、第一その出現の仕方にしてからが、奇跡を起こす人物にふさわしく、大変劇的である。

時に元弘元年（1331）後醍醐天皇が、無謀とも言うべき挙兵を実行し、笠置山の天険に拠って、反鎌倉勢力の蜂起を待っていた時である。或る夜の御夢に、紫震殿の前庭に大きな樹があり、その樹の南側に玉座が設けられていると見えたが、其処に二人の童子が現われ、潸然と涙を流して、

「玉体のつつがなくおはします所は、天が下、此処より他にはございません。」

と言つたかと見る間に、忽然と消え失せたと言う。天皇は覚めて後、御自ら夢判断をなされ、木の南ということに縁のある人物を求められ、遂に楠木を発見、召し出されたのである。

正夢を後醍醐帝は御覽じる
楠はつくりの方に御味方

こういう話は、後になつていくら科学的な分析をした所で、最初に伝説を生み出した人々の情熱には及びもつかない訳で、黙つて信ずるのが一番良い

ようである。なお、この時正成が言った言葉として、

「一度や二度の勝敗はわかりませんが、正成一人なを生きてありと聞かれましたなら、最後には御運の開かせ給うものと思召し下されますように。」

と「太平記」は伝えているが、誠に百年に一度聞かれるかどうかの名科白で、「太平記」最初の十巻は、正にこの言葉を中心に書かれたと言つて過言ではないであろう。

この後正成は、一旦河内に帰り、挙兵の準備にかかるのだが、その折り四天王寺に参詣し、武運を祈つた時、一老僧から聖徳太子直筆の「天王寺未来記」なる秘書を閲覧させて貰つたと言う。その書に曰く、

「人皇九十五代に当たって、天下一たび乱れて主安からず。この時東魚來つて四海を呑む。日西天に没すること二百七十余日、西鳥來つて東魚を食ふ…云々」

実に驚くべき予言書なのである。

この西鳥と言うのが、楠木正成なのかどうか、それはよく解らないが、東魚と言うのは、高時に間違いないというので、

未来記で見れば高時さかな也
相模入道俳名は東魚なり
入道を東魚はたこの見立てなり

たこなら東魚でなく章魚と書く所だろうが、こうした文書まで持ち出す程に、正成の出現は、神秘的な奇跡として当時の人々から受け取られていたのである。

とにかく正成が金剛山千早城にたて籠もつた時、味方の数は千数百名。僅かこれだけの人数で、誇張があるとは言え、百万と号した鎌倉方の寄せ手を相手に、智謀の限りを尽くして奮闘、敵にキリキリ舞をさせたのだから、「三国志」の諸葛孔明の再来として、賞讃の的となつたのも当然であった。

神代にも聞かぬ千早のはかりごと
古狸めがと千早の寄手言ひ
楠木に歩三兵にてなぶられる

戦前の小学校の国語読本には、「千早城」の一節があり、先生方も熱弁を振るつて、正成の忠と智と勇とを兼ね備えた武者ぶりの素晴らしいを、大いに喧伝してくれたものだが、その点、現代の子供達は、何もかも自分で読むしかないだけ不幸かもしれない。但し誰が読んでも面白いものだけに、是非一読はお薦めしたい。

それはともかく、寄手の大軍が城の壁に熊手をかけて引き倒そうとすると、壁が二重になっていて、上の板が崩れると、内に仕込んでいた岩や樹木が頭の上に降ってくるとか、次の戦いでは頭上に楯をかざして攻め上がろうとすると、柄杓で熱湯をかけるとか、これまでの武士の常識では想像も出来ない新手の戦術が、次々に登場するのである。

これを「悪党の戦い」と称し、歴史学者は楠木方に加わった軍隊の階級的な基盤を解明する手がかりとしているらしいが、体裁も外聞も一切かなぐり

捨てて、必要ならどんな汚ない手を使っても戦い抜く、その底知れぬバイタリティーは、正に瞠目に値するものがあつたようだ。現にこの時、敵の頭にぶちかけたのは、ただの湯ではなく、城兵の排泄物をグラグラ熱した代物だったという説もあつて、川柳子も面白がって、そちらの説を採用しているようである。水の乏しい山城のこと、考えて見れば其の方が余程合理的である。

楠木は鼻をつまんで下知をなし
千早の寄手黄おどしになって逃げ
汚なしかえせと千早の寄手言ひ

これは確かに汚かったに違いない。

この他にも、敵の水攻めの裏をかいたり、藁人形に鎧を着せて、敵をおびき出して殲滅したり、次から次へと神算鬼謀、意表をついだ戦術で、鎌倉勢にキリキリ舞をさせたのである。

中でも川柳が一特に面白がって取り上げているのが、「泣き男」の話である。これは既に「建武の新政」が失敗し、足利尊氏による内乱が決定的となった段階での話だが、正成が近隣諸国から、一芸一能に秀でた者は身分の高下に関わらず召し抱えようと、触れを廻したことがあつた。その時応募して来た者の中に、杉本佐兵衛という嘘泣きの名人が居たのである。正成は、

「これも確かに、一芸には違いない。」

と周囲の反対を押し切って、自分の幕下に加えたのである。

杉本は他家で扶持せぬ男なり
もう良いもう良いと楠木召し抱え
目拭いて杉本佐兵衛飯につき

所が建武二年（1335）鎌倉から攻め上った足利勢との決戦で、この男が果然大手柄をたてるのである。比叡坂本の戦いで雌雄を決しかね、京に引き上げた足利勢の斥候が、戦場で妙な男をつかまえた。戦さ場に残る屍の顔を一人一人確かめ、何やら遺物など拾い集めているので訊問した所、

「楠木判官殿、北畠顕家卿、共に討ち死にを遂げられたらしく、ただ今その搜索の最中でございまして…」

とのこと。涙潸然と下る様子は、到底嘘とは思われない。喜んだ斥候が、早速本陣に報告したから尊氏も大満足。すっかり警戒を解いて、ぐっすり寝込んでしまった。

それを見すました楠木方、夜陰に乘じて奇襲を掛けたから、足利方は敗走また敗走、遂に九州まで落ちのびなければならなかつたと言う。杉本の嘘泣きが、いかに天才的なものであったかを物語る証拠であろう。

今から弔いが出るように佐兵衛泣き
もういいと言うに杉本しゃくり上げ
子の死んだように佐兵衛は泣いている

こうした正成の、人智を尽くしての奮闘も、時の勢いには抗し難く、九州で勢力を回復した尊氏は、再び怒涛の如く上洛する。

これを迎える天皇方は、正成の提言する柔軟な戦術を否決、無謀な全面的対決のため、湊川への出陣に命令する。

今はこれまでと覚悟をした正成は、一子・正行に後のことわざをくれぐれも言い遺して決別する。これが「桜井の駅の別れ」と言う場面で、昔の小学生は「大楠公」などと言う唱歌で、子供の頃から親しんだものだが、こんな事を言い出すのも、老人の感傷と言うものであろう。

旗持ちも貴い泣きする湊川
湊川ほんに泣いたと佐兵衛言ひ
奥方に遺言はなし湊川

奥方に遺言の無いのが立派かどうか、議論の余地はあるだろうが、正成には何時も私利私欲を離れた、より高い所を見つめている爽かさがある。常に自己の能力の極限を生きて来た男の、後悔の無い透明感である。

彼が湊川に出陣する直前、私淑する禪僧に示したと言う次の偈は、見事にそれを示しているように思われるのだが、どうであろうか？

— 生死の両頭を裁断して、一剣、天に懸って高し —

行年、四十三歳だったと言う。

うしろ厄などと楠木借しがられ

(次回第7回は「新田義貞」です)

〈2〉

2007年3月発信の203号に掲載したものです。魚山釣太さんはペンネームですが、一部上場会社の部長さんでした。旅行と釣りとお酒が趣味のようでしたが、著作の一つ「アイダホ紀行」が図書館協会推薦図書となるほどの文筆家で天地シニアにも多数の作品を寄稿してくださいました。日本物は少なかったのですがその一つを紹介します。80歳を越えた年齢になるはずですが、最近のご様子がわからず心配しています。(事務局)

ティートン・バレー釣り紀行（米国アイダホ州点描）
魚山 釣太

(Ⅱ)

ウイリアム・アシュレイは、始めのうちは罠猟と毛皮交易を、彼のよく知っているミズリー川流域に限ろうとしたが、他社と競争しているうちに次第に未知のロッキー山系の奥深くへと入り込み、彼が雇った男達はそこでマウンテン・マンの生活を強いられるようになった。

マウンテン・マンには、特定の会社に雇われて年俸を貰うハイヤード・トラッパー、一年ごとに単一の会社と自由契約を結ぶスキン・トラッパー、全く自由行動でフリーに取引するフリー・トラッパーの三種類があった。彼等は未開の山野で、野蛮で最低限度の生活に甘んじ、過酷な自然と同時に原住民とも戦

い、あるいは原住民と共に存してその生活習慣を取り入れ、原住民の女を妻にするなどして、金銭を得ることと冒険を生甲斐に、辺境の孤独な生活に耐えていた。頑強で、野蛮な原始生活に習熟したマウンテン・マンの中には、競争相手の獵を妨害するために、原住民を扇動するなど手段を選ばない者もいた。

1823年から24年の冬にかけて、ウイリアム・アシュレイは、ジム・ブリッジャー、トマス・フィッツパトリック、ジュディディア・スミス等をワイオミングのウインド・リバー山脈西方地域の探査に派遣した。彼等はそそり立つウインド・リバー山脈の東側面に沿ってスイート・ウォーター・リバーを遡る途中で、西部開拓史上最大の発見といわれるサウス・パスを見つけた。この発見によってオレゴン・トレールが通じ、そこを通って移住者の幌馬車隊が更に西へと目指して行くことになったのである。

アシュレイは、最初は各地に交易所を設けて、そこへファー・トラッパーが獲ってきた毛皮を集めていたが、そのうちに何箇所も交易所を設けて維持する費用を節約し、また砦を築くことによる原住民との摩擦を避けて効率的にファー・トレーディングが出来る独創的な方法を編み出した。年に一回初夏のある日に、期日を決めて指定場所に集まり、そこでトラッパーやインディアンの毛皮を買い取り、またそこへ、トラッパー達に必要な補給物資を運んで供給するというやり方である。それが「トラッパーズ・ランデブー」と呼ばれる方法だった。

そのランデブーの場所として、ここドリッグスの町の近く、グランド・ティートンの西側のピエールズ・ホールが選ばれたのである。集会には一年間の収穫をたずさえた罠猟師達やインディアンの部族が、広汎な地域から続々と集まってきた。この日は年一回の交易の日であるとともに、一年間の長い孤独な日々を過ごした罠猟師たちにとって、大勢の仲間と交流し、文明の匂いに触れる唯一の日でもあった。

色々な競争をしたり、レスリングをしたり、ライフルで射撃をしたり、馬を走らせたり、互いに腕を競い合って楽しんだ。酒盛が始まり、唄い、踊り、大騒ぎをして自分達の冒険や成功について大法螺を吹きあつた。猟師たちの交歓の間に、補給品を満載した幌馬車隊が峡谷を抜けてキャンプ地に入ってきた。直ちに梱包が開かれ、ライフルや弾薬、ナイフ、毛布、装身具、鍋などが値段かまわず買い求められた。そして、空になった幌馬車には、買い集められた毛皮が積まれて東へと運ぶ準備が整えられるのであった。

1パインと4ドルのきついアルコールで酔っ払い、喧嘩や博打、あらゆる種類の気違いじみた底抜けの馬鹿騒ぎの後は、一年の稼ぎをすっかり使い果たし借金まで背負うものもいた。そうして宴の後は、一頭の馬と二頭の駄馬、一挺のライフルと弾薬、罠とナイフ、コーヒー・ポットとフライパン、毛布、それに煙草とアルコールを携えて、頑丈なファー・トラッパー達は、翌年の「ランデブー」を楽しみに、また一年間の激しい労働と厳しい孤独な生活へと散っていくのだった。

ドリッグスの町の夏の「ランデブー記念祭」は、このような過去の「トラッパーズ・ランデブー」を再現しようという催しである。

ドリッグスの町の東側は、数マイル先の山麓まで広々とした平原で、牛や羊が草をはむ牧場が連なっている。そしてその先には、グランド・ティートンの特徴のある尖峰が遙かにかすんで見える。その4000メートル級の連山の

東側、グランド・ティートン・ナショナル・パークは、名画「シェーン」の舞台となったスネーク・リバーの上流域である。

1870年代から80年代にかけて、ワイオミングのこの地方にも多数のロング・ホーン牛がテキサスから移入されて牧畜業が盛んになったが、1886年からの酷暑、酷寒のために多数の牛が死に、牧畜業者で破産するものが相続いだ。その結果、牛や牧場をめぐって大牧場主と小牧場主との間に血みどろの紛争が起こり、遂には連邦軍が出動してようやく鎮圧された。西部開拓史上有名な「ラトラーズ・ウォー」（牛泥棒戦争）で、映画「シェーン」は、これを題材にしたジャック・シェーファーの小説が原作である。

グランド・ティートン主峰の特徴のある尖った山容は、かなりの遠方からでも格好の目印になったであろうし、ドリッゲス郊外の広大な草原とティートン・リバーの清流は、数百人のマウンテン・マンや輸送隊、友好的インディアン達がテントを張り、その数倍の馬や家畜を休ませる野営地として最適であり、かつてこの場所を「ランデブー」に選んだ理由が十分に理解できる。ドリックス郊外に開けた草原の一隅に立ち、ティートン連山の偉容を眺めていると、一年のうちのほんの僅かな時間喧騒が野に満ち、そしてまた、もとの悠久の静寂に包まれていった往時のランデブーの様子がまぶたに浮かんでくるようだった。

ハイウェイ31号線と33号線のジャンクションにあるビクターという町のフィッシング・タックル・ストアで有能な女性スタッフからティートン・リバーのフィッシング・ポイントを教えてもらい、夏のこの川に最適なフライと、河川でのフライ・フィッシングに不可欠なウエーディング・ギアを購入した。ゴム製のかなり上質なもの価格が日本の半額以下の値段で手に入った。

ビクターからドリッゲスまでは僅か9マイルである。予定通り午後2時頃には予約したモーテルに到着した。部屋に落ち着いて、近くのストアで仕入れてきた地ビールを飲んで一休みした。ビクターの町外れにある「オットー・ブラザーズ・ブリュアリング社」の工場で生産された地ビールである。アイダホ・ワインもなかなか美味しいが、空気の乾燥したこの地ではビールが格別にうまい。

アイダホの夏は夜が遅い。4月からデイライト・セイビング・タイムが実施されているので、10時頃になってやっと日が暮れる。従って釣りのゴールデン・タイムの「まづめ」は夜の9時前後からである。7時頃にモーテルを出て、街から15分くらいの所の、釣り道具屋の女性スタッフが教えてくれた第一のポイントへ出掛けた。ティートン・クリークの合流点のやや下流、ティートン・リバーに架かるサウス・ベイト・ロードの橋のたもとである。川幅は広く、野草の茂った両岸一杯に豊かな水流がゆったりと流れ、水面の所々にライズがみられた。傾き始めた陽の光の中、川岸の水際や川中の水上にメイ・フライの蚊柱がいくつも立ち、それを追って燕が舞っていた。

ここから5マイル程上流で、ティートン山脈から流れ降る何本もの支流の一つ、トレイル・クリークが合流している。この支流の流域周辺で、かつて「トラッパーズ・ランデブー」の最中にバトル・オブ・ピエールズ・ホールと呼ばれるインディアンとの激しい戦闘があった。

1832年7月18日の早朝、ドリックスの町近くの絵のように美しい草原で、トラッパーズ・ランデブーが終わりを迎えようとしていた。ロッキー・

マウンテン・ファー・カンパニーのグループが例年のお祭り騒ぎを切り上げて早立ちしようと数マイル南へ移動して集結していた。そこへモンタナのグロス・ベンターズ酋長に率いられたインディアンの一部族が通りかかった。彼等は親戚であるアラバホ族を訪問した後、居住地へ帰るために北へ向かっていたのである。

両者はしばらく対峙していたが、やがて不信感がつのりライフルが発射された。応援に駆けつけたランデブー参加者を巻き込んで戦闘は丸一日つづいた。5人のファー・トラッパーと戦闘に参加した友好的インディアンの戦士7人が死んだ。グロス・ベンターズ酋長が何人の死者を運び去ったかは何の記録も無く、今では誰にも分からぬ。

なお、この戦闘の詳細については別稿「ピエールズ・ホールの戦闘」をお読みいただきたい。ティートン・リバーの豊かな水の流れは、このような人間の営みや激しい争いをよそに、悠久の時間の中を静かに流れ続けている。

思い思いにウエーディングして、2時間ほどフライ・ロッドのキャスティングを繰り返した結果、この日釣に参加した4名のうち3名が2匹づつの鱈を釣り上げることができた。いずれも40センチに満たないやや小ぶりの鱈だったが、いずれヘンリーズ・フォークの大型レインボーを狙う腕試しとしては上出来の成果だった。

明朝は、5マイル程下流、ホース・シュウ・クリークとバックサドル・クリークとがティートン・リバーに合流する箇所の中間にある橋、キャッヂェ・ブリッジ周辺の二番目のポイントを攻めた後、午後にはいよいよ世界一の鱈の川、ヘンリーズ・フォーク・オブ・ザ・スネーク・リバーへ向かう。(つづく)

講演会

奈良興福寺文化講座 28年2月4日（木曜日）

午後5時半～6時半：第一講

講演：「入門般若心経一その5」興福寺副貫首 森谷英俊

午後6時40分～7時・・・・心を静める

午後7時～8時：第二講

連続講話・「奈良・祈り・心」 興福寺 貫首 多川俊映

会場：（学）文化学園 受講料：500円

（JR新宿駅南口、小田急線、京王線各新宿駅から8分、都営新宿線新宿駅3分）

第66回 新三木会講演会のご案内

1. 日時：28年1月21日（木）13:00～14:45 如水会館2Fスターホール

2. 演題：『映画にみる、日米文化の差異』

3. 講師：マーク・ピーターセン・明治大学教授

4. 申込 Email：shinsanmokukai@gmail.com 電話：047-464-4063

会費：2千円、婦人千円、学生無料

5. 予 告 第 67 回 (2/18) 『遠くて近い国トルコ』 仮題
A・ビュレント・メリチ氏(駐日トルコ大使)

天地シニアでも受付します

商 品 情 報

<日本緑茶センター商品>

商 品 名	市 價	天地 提 供 価 格
ハーブティー		
POMPADOUR ドイツ商品 (1.5 g × 10 ティーバッグ) <ペパーミントリーフ><カモミールフラワー> <ローズヒップ&ハイビスカスフラワー><ミックスフルーツ><ルイボステイー・ストレート><インディアンチャイクラシック>	本体 @ 300 円	@ 250 円
中国茶		
(日本緑茶センター：茶語・チャニー) <リーフ> 一高級一 <安溪鉄觀音><黄金桂><雲南普洱> (以上 70 g) <凍頂烏龍 (70 g)> <龍井 (60 g)>	@ 630 円 @ 735 円 @ 840 円	@ 480 円 @ 560 円 @ 640 円
紅茶		
ドイツのティーメーカー・テーカンネ社 オリジナルブランド紅茶シリーズ (1.75 g × 20 TB) <ダージリン><アールグレイ><イングリッシュブレックファースト>	@ 500 円	@ 380 円
日本緑茶センター：ティーブティック (2 g × 10 TB) <セイロン><ローズヒップ&ハイビスカスフラワー><ピーチアプリコット><ローズティー><ブルーベリー>	@ 350 円	@ 280 円
マテ茶 (南米のお茶・世界三大飲料の一つ・パラグアイ)		
パハリト・パラグアイ N01 マテ茶・インスタント・タイプ (75 g)	@ 1030 円	@ 750 円
ティーブティック・1.5 g × 10 TB <マテ・グリーン><マテ・ブラック>	@ 380 円	@ 300 円
5つのすっきりブレンド茶 (凍頂烏龍、ベニフウキ緑茶、甜茶、ペパーミント、レモンバーム) ブレンド	@ 1260 円	@ 900 円
アルガンオイル (2タイプ) (92 g) (モロッコ特産・食用・万能オイル) 超人気商品 ノンロースト (食用・化粧両用) ロースト (食用) の2タイプ	@ 1900 円	@ 1500 円
オリーブオイル [ナフィサ] (229 g) モロッコ、名門農園の製品。高級。 赤 (インテンス) : ドライ : 青 (デュース) : スイート	@ 1800 円	@ 1400 円

ジェーン・クレージーソルト (113g)	@ 627	@ 500円
----------------------	-------	--------

地元徳島で大人気の梅酒（徳島県・吉野川市・美郷）

＜東野リキュール製造所＞

N0	商品名	(特徴)	製造元	天地価格
1	梅酒 白竜峡	酸味を抑える女性向	東野リキュー ルール製造所	@ 2500円
2	高越山	渋みが少しあり、酒好きな方向き		@ 2500円
3	紅竜峡	ロゼワインを彷彿させる		@ 2500円
4	梅干 竜峡（小梅）	480g・昔の味、	天野農園	@ 1350円
5	南高梅（大）			@ 1350円
6	ジャム ブルーベリー（100g）	無添加、自然食品。おすすめ	くいな農園	@ 450円

上記のように天地シニア推薦の商品のご斡旋をしています。お申し込みは、メール、またはFAXで 天地シニアまでどうぞ。お申込み金額が4千円以上の場合には送料は天地シニアで負担します。

事務局

＜新事務所までの道のり＞

場所：〒110-0016 台東区台東2-21-9 双葉ビル2F202号
(電話・FAX 番号：03-3837-0290)

① JR「御徒町駅」東京メトロ日比谷線「中御徒町駅」から12~3分
昭和通り（松坂屋と反対側）を渡り、バス道路をディスカウント・ストア
多慶屋の横を真っ直ぐ7-8分歩く。都営大江戸線『新御徒町』の出口があり、
その直ぐ隣に「佐竹商店街」入り口があります。商店街アーケードを南進して、
南出口を出て直角に右折、約50メートル、道路左側にある薄青いビル
の2階。1階は焼肉屋「もとやま」

② 都営大江戸線「新御徒町駅」A2出口を出て「佐竹商店街」入り口から、
商店街アーケードを南出口へ、約5分。突き当たって右へ、約50メートル先、モスグリーンの3階たてビルの2階。1階は、焼き肉「もとやま」。

* Yahoo の地図検索 台東区台東2丁目で「双葉ビル」が表示されます。

<投稿歓迎><図書の推薦依頼>

<プリント版・郵送>

メール版(無料)を月に一回編集してプリント版を発行郵送しています。お申込みくださいとすれば送ります。その際には、実費として1月350円(4200円/年)をいただいているのでご了承ください。

<振込先>振込先：三井住友銀行「神田支店」（普通）7871532
(口座名) テンチニアネットワーク

<配信・郵送、不要の場合はご一報ください、中止いたします。>

天地シニアネットワーク・テーブル・417号

発行：2016年1月15日

：天地シニアネットワーク事務局（津田 孚人）

〒110-0016 台東区台東2-21-9 双葉ビル2F202号室

TEL・FAX 03-3837-0290

E-Mail tenti@mvc.biglobe.ne.jp

URL <http://www5a.biglobe.ne/~tenti/>